

重点取組分野	令和 4 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①子どもが獲得した知識を活用できるよう、学習指導の内容や教材を学年内で共有する。また、高学年での教科担任制を継続し、他の学年でも一部教科分担任制に取り組み効果的な指導に取り組む。②協力的な学習の場を積極的に取り入れ、子ども同士の関わりを増やすことで、自分の考えや友達の考え方のよさに気づきながら思考力を伸ばす授業づくりをする。	週に1回のブロック学年研の時間に、学習指導の内容の共有を丁寧に取り組んだ。どのような活動をするのか、何を身に付けさせるのかを学年やブロックで共有しながら取り組んだ。教科担任制については、高学年で実施し、担当の教科についての教材研究の時間が確保でき、より深い学びへとつながった。	B
豊かな心	①YPアセスメントと横浜プログラムを活用し、一人ひとりの子どもに寄り添った指導・支援を継続し、互いに認め合える温かい学級風土づくりを進める。②道徳の授業において、子どもが主体的に考え、道徳的価値をとらえることができる授業を目指す。③自らあいさつできる子どもの姿を目指す。④自らあいさつ運動の取組を継続する。	①年2回、YPアセスメントを実施し、学級風土を見つめたり個人カルテをもとに支援検討会を行い、指導や支援の改善を図った。クラスの実態に合った横浜プログラムを実施することで、仲間づくりを進めた。②子どもが発言しやすい道徳の授業を目指し、手だての工夫をした。③あいさつのできる児童が多いという本校のよさを継続していきよう、取組を続けていきたい。	B
健やかな体	①体育の授業や、運動委員会の児童の活動を通して、年間を通して、運動に親しむ環境を整える。②食育部を中心に、給食目標や給食週間を設定し、好き嫌いをなく食べることの習慣を身に付けたり、食の大切さを考えるための取り組みを実施する。	①運動委員会や環境保健委員会などの委員会を中心に、運動に親しむ取組を実施した。学校保健委員会では、健康な体づくりをテーマに、各クラスで運動目標を作成し、目標達成に向けて取り組んだ。②食育部を中心に、毎月給食目標を設定して取り組んだ。給食週間には、給食委員会が食事のマナーについて呼びかけた。	B
地域連携	①学校運営協議会を立ち上げ、地域・社会とつながる学校づくりを進める。②コロナ禍の制限がある中でも、地域の人と関わる機会や方法を工夫し、地域とともに歩む子どもを育てる。③生活科や総合的な学習の時間では子どもの実態や願いを明らかにしながら学習を展開していく。また、地域の「材」について、子どもたちが主体的に関わったり取り組んだりできるよ	①学校運営協議会が立ち上がり、教職員が地域の人々と直接話をする機会ができた。②幼稚園や中学校との交流や、地域の様子を調べる活動などを通して、地域とのつながりを意識した学習をすることができた。③子どもたちが進んで取り組める単元によるよう、構想を工夫した。来年度は、より主体的な姿を目指し、研究を続けていく。	A
いじめへの対応	①児童・家庭・地域の実態を把握し、児童が安心して力を発揮できる集団を育てることで、いじめの未然防止に努める。②いじめ防止対策委員会を中心とした全職員による情報共有と、早期対応、確実な事後指導を組織的に行う。③アンケートや教育相談を定期的に行い、児童が相談しやすい環境を整える。	①学年やブロックで児童の実態を共通理解し、適切な働きかけを行うことで、いじめの未然防止に取り組んだ。②いじめを積極的に認知し、早期対応を行うことができた。事後指導や再発防止の取組は十分ではなかった部分があるので次年度に生かしたい。③計画的なアンケートと教育相談により、いじめの早期発見ができた。	B
人材育成・組織運営(働き方)	①教員がゆとりをもって取り組むことが子どもの活動の豊かさにつながると考え、持続可能な働き方のできる職員室を目標としていく。業務改善に取り組み、午後の時間を明日の準備に充てられるようにする。また、教科担任制やチーム学年経営により、効率的に授業準備に取り組めるようにする。②ブロック経営という視点で、若手教員に育成に学年内だけでなく学校全体で関わっていく。	①日課表の見直しや、年間授業時数の見直しに取り組む、職員の午後の時間の確保に取り組んだ。また、成績処理や、行事の運営など必要なものとしていないものを精選し、持続可能な働き方の実現につながった。②ブロック研を週一回設定した。ブロック研の運営の仕方については来年度以降、検討する必要がある	B
コミュニケーション能力	①たてわり活動を通して他学年と関わる経験をする中で、コミュニケーション能力を育てる。②なかよしフェスティバル等、様々な場面で自分の考えや学習したことを伝える活動を通して、自分の考えを効果的に伝える方法を学ぶ。③子どもたちが自発的に発信したい、相手に伝えたいと思えるような学習内容や展開の工夫をする。	①学校スローガン「スマイル高舟台45周年」のイである「いろいろな学年となかよし」を達成しよう活動することができた。②③重点研究のテーマ「発信力」を考えると、職員がどのような機会にどんな手立てを打てば主体性が伸びるのかを検証した。自分の考えを積極的に発信するにはまだまだ検討の余地がある。	B
考えて行動する力	①日々の授業で、見通しをもったり、自分の考えをもったりすることができるような指導・支援を継続する。②児童が必然性をもって考えたり発信したりする姿を目指した授業の工夫をする。	①掲示物の活用やロイロノートの活用など、自主的に学習を進めていく手段は様々なことを児童に伝えながら指導を継続した。②児童が目的意識や相手を意識をもって臨めるような場の設定をした。「なぜ」「どうして」といった問い返しも成果をあげる要因となっている。	B
児童生徒指導	①「こども手帳」の内容を中心に指導事項を共通理解し、一貫性と継続性のある生活指導を行うことで、児童が落ち着いて学校生活を送れるようにする。②YPなどを活用し、児童の自己肯定感を高めるとともに、児童が安心して力を発揮できる集団を育てる。③研修を通して、児童の課題に適切な指導・支援を行う力を高める。	①「こども手帳」に基づき、一貫性のある指導を行うことで、児童が安心して過ごせる環境を整えた。②YPアセスメントの結果をもとに支援検討会をもち、個や集団の課題に応じた支援を行った。③研修を通して対応力を高めることができたが、未然防止の観点からの取組が不十分であった。次年度の課題として取り組んでいく。	B
特別支援教育	①特別支援教育委員会を中心に、支援を要する児童の実態を丁寧に把握し、個に応じた支援の在り方を考える。②特別支援教室を有効に活用し、集団不適応や登校しづりなど課題のある児童への支援と指導を継続的に行う。③支援を要する児童が、安心して学習に参加できるよう、授業や教室環境等の改善を行う。	①個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成と共有が進んだが、活用については改善の余地がある。②特別支援教室の機能を拡充し、児童のさまざまなニーズに応じた支援ができた。③個別最適な学びを実現するための環境改善や授業改善について研修をした。	A
ブロック内評価後の気づき	釜利谷中ブロックでは、集団の中でお互いの認め合い高めあおうとする子供を育てるための、人との関わり、つながり、コミュニケーション能力を大切にしながら、認め合い、高めあう力の育成を目指してきた。学力学習状況調査の結果から、意見をやりとりすることや、人とコミュニケーションをとるのが好きという児童が多い傾向が見られたことは、ブロックや各校で取り組んできた成果である。地域行事への参加意識も高いことから、学校や保護者だけでなく地域の方々も子供への関わりが多くあり、コミュニケーションを大切にしている子供の育成につながっていると考える。		
学校関係者評価	学校行事等への参加の機会は少なかったが、ICTを活用しながら学習する児童の姿や、一人一人に丁寧に対応する教師の姿を見ることができた。個別支援学級や特別支援教室など学習の場が工夫されている。4月と比べると児童が大きく成長していることが分かる。コロナの影響がまだ残る中、学校は子どもたちに寄り添い、細かい支援をしていると感じる。職員の負担が大きいのではないかと、地域でできることを一緒に考えていきたい。		
中期取組目標振り返り	コロナ禍での持続可能な教育活動の構築を念頭に、職員の働き方を踏まえ、教育活動の価値を検証した1年であった。児童や職員の健康と安全を第一に、感染状況や衛生管理マニュアルに則って内容を精選し、安定した教育活動の持続を心がけた。特別支援教室を整備し、登校支援や学習支援、教育相談など、支援を必要とする児童が落ち着いて生活や学習する環境となっている。教育課程の中で「自発的・主体的に行動する力」の育成を目指し、教科を問わず発信力をテーマに研究を進めた。タブレット端末は各学年学級において積極的に活用され、実績も蓄積されていた。学校運営協議会が発足し、教育活動における地域連携は、地域防災拠点訓練の児童の参加や近隣幼保小と連携した教育活動など、この1年で大きく進んだ。今後も児童の健康や安全と学校の教育活動の両立を継続していく。		

重点取組分野	令和 5 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①子どもが獲得した知識を活用できるよう、学習指導の内容や教材を学年内で共有する。また、中・高学年で教科担任制を実施し、低学年でも一部教科分担任制に取り組み効果的な指導を行う。②協力的な学習の場を積極的に取り入れ、子ども同士の関わりを増やすことで、自分の考えや友達の考え方のよさに気づきながら思考力を伸ばす授業づくりをする。		
豊かな心	①YPアセスメントと横浜プログラムを活用し、一人ひとりの子どもに寄り添った指導・支援を継続し、互いに認め合える温かい学級風土づくりを進める。②道徳の授業において、子どもが主体的に考え、道徳的価値をとらえることができる授業を目指す。③自らあいさつできる子どもの姿を目指す。④自らあいさつ運動の取組を継続する。		
健やかな体	①体育の授業や運動委員会の児童の活動を通して、年間を通して様々な運動に親しむ環境を整える。②食育部を中心に、給食目標や給食週間を設定し、好き嫌いをなく食べることの習慣を身に付けたり、食の大切さを考えるための取組を実施する。		
地域連携	①学校運営協議会と連携し、地域・社会とつながる学校づくりを進める。②コロナ後も感染症対策を十分にとつたうえで、地域の人と関わる機会や方法を工夫し、地域とともに歩む子どもを育てる。③生活科や総合的な学習の時間では子どもの実態や願いを明らかにしながら学習を展開していく。また、地域の「材」について、子どもたちが主体的に関わったり取り組んだりできるように教材研究を進める		
いじめへの対応	①児童・家庭・地域の実態を把握し、児童が安心して力を発揮できる集団を育てることで、いじめの未然防止に努める。②いじめ防止対策委員会を中心とした全職員による情報共有と、早期対応、確実な事後指導を組織的に行う。③アンケートや教育相談を定期的に行い、児童が相談しやすい環境を整える。		
人材育成・組織運営(働き方)	①教員がゆとりをもって取り組むことが子どもの活動の豊かさにつながると考え、持続可能な働き方のできる職員室を目標としていく。業務改善に取り組み、午後の時間を明日の準備に充てられるようにする。また、教科担任制やチーム学年経営により、効率的に授業準備に取り組めるようにする。②ブロック経営という視点を生かし、若手教員の育成に学年内だけでなく学校全体で関わっていく。		
コミュニケーション能力	①たてわり活動を通して他学年と関わる経験をする中で、コミュニケーション能力を育てる。②なかよしフェスティバル等、様々な場面で自分の考えや学習したことを伝える活動を通して、自分の考えを効果的に伝える方法を学ぶ。③子どもたちが自発的に発信したい、相手に伝えたいと思えるように、教師自身が教材開発の面白さを感じながら学習内容や展開の工夫をする。		
考えて行動する力	①日々の授業で、見通しをもったり、自分の考えをもったりすることができるような指導・支援を継続する。②児童が必然性をもって考えたり発信したりする姿を目指した授業の工夫をする。		
児童生徒指導	①「こども手帳」の内容を中心に指導事項を共通理解し、一貫性と継続性のある生活指導を行うことで、児童が落ち着いて学校生活を送れるようにする。②YPなどを活用し、児童の自己肯定感を高めるとともに、児童が安心して力を発揮できる集団を育てる。③研修を通して、組織的に児童の課題に適切な指導・支援を行う力を高める。		
特別支援教育	①特別支援教育委員会を中心に、支援を要する児童の実態を丁寧に把握し、個に応じた支援の在り方を考える。②特別支援教室を有効に活用し、集団不適応や登校しづりなど課題のある児童への支援と指導を継続的に行う。③支援を要する児童が、安心して学習に参加できるよう、授業や教室環境等の改善を行う。		
ブロック内評価後の気づき	釜利谷中ブロックでは、集団の中でお互いの認め合い高めあおうとする子供を育てるための、人との関わり、つながり、コミュニケーション能力を大切にしながら、認め合い、高めあう力の育成を目指してきた。学力学習状況調査の結果から、意見をやりとりすることや、人とコミュニケーションをとるのが好きという児童が多い傾向が見られたことは、ブロックや各校で取り組んできた成果である。地域行事への参加意識も高いことから、学校や保護者だけでなく地域の方々も子供への関わりが多くあり、コミュニケーションを大切にしている子供の育成につながっていると考える。		
学校関係者評価	学校行事等への参加の機会は少なかったが、ICTを活用しながら学習する児童の姿や、一人一人に丁寧に対応する教師の姿を見ることができた。個別支援学級や特別支援教室など学習の場が工夫されている。4月と比べると児童が大きく成長していることが分かる。コロナの影響がまだ残る中、学校は子どもたちに寄り添い、細かい支援をしていると感じる。職員の負担が大きいのではないかと、地域でできることを一緒に考えていきたい。		
中期取組目標振り返り	コロナ禍での持続可能な教育活動の構築を念頭に、職員の働き方を踏まえ、教育活動の価値を検証した1年であった。児童や職員の健康と安全を第一に、感染状況や衛生管理マニュアルに則って内容を精選し、安定した教育活動の持続を心がけた。特別支援教室を整備し、登校支援や学習支援、教育相談など、支援を必要とする児童が落ち着いて生活や学習する環境となっている。教育課程の中で「自発的・主体的に行動する力」の育成を目指し、教科を問わず発信力をテーマに研究を進めた。タブレット端末は各学年学級において積極的に活用され、実績も蓄積されていた。学校運営協議会が発足し、教育活動における地域連携は、地域防災拠点訓練の児童の参加や近隣幼保小と連携した教育活動など、この1年で大きく進んだ。今後も児童の健康や安全と学校の教育活動の両立を継続していく。		

重点取組分野	令和 6 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	c1		
豊かな心	c2		
健やかな体	c3		
地域連携	c4		
いじめへの対応	c5		
人材育成・組織運営(働き方)	c6		
コミュニケーション能力	c7		
考えて行動する力	c8		
児童生徒指導	c9		
特別支援教育	c10		
ブロック内評価後の気づき	釜利谷中ブロックでは、集団の中でお互いの認め合い高めあおうとする子供を育てるための、人との関わり、つながり、コミュニケーション能力を大切にしながら、認め合い、高めあう力の育成を目指してきた。学力学習状況調査の結果から、意見をやりとりすることや、人とコミュニケーションをとるのが好きという児童が多い傾向が見られたことは、ブロックや各校で取り組んできた成果である。地域行事への参加意識も高いことから、学校や保護者だけでなく地域の方々も子供への関わりが多くあり、コミュニケーションを大切にしている子供の育成につながっていると考える。		
学校関係者評価	学校行事等への参加の機会は少なかったが、ICTを活用しながら学習する児童の姿や、一人一人に丁寧に対応する教師の姿を見ることができた。個別支援学級や特別支援教室など学習の場が工夫されている。4月と比べると児童が大きく成長していることが分かる。コロナの影響がまだ残る中、学校は子どもたちに寄り添い、細かい支援をしていると感じる。職員の負担が大きいのではないかと、地域でできることを一緒に考えていきたい。		
中期取組目標振り返り	コロナ禍での持続可能な教育活動の構築を念頭に、職員の働き方を踏まえ、教育活動の価値を検証した1年であった。児童や職員の健康と安全を第一に、感染状況や衛生管理マニュアルに則って内容を精選し、安定した教育活動の持続を心がけた。特別支援教室を整備し、登校支援や学習支援、教育相談など、支援を必要とする児童が落ち着いて生活や学習する環境となっている。教育課程の中で「自発的・主体的に行動する力」の育成を目指し、教科を問わず発信力をテーマに研究を進めた。タブレット端末は各学年学級において積極的に活用され、実績も蓄積されていた。学校運営協議会が発足し、教育活動における地域連携は、地域防災拠点訓練の児童の参加や近隣幼保小と連携した教育活動など、この1年で大きく進んだ。今後も児童の健康や安全と学校の教育活動の両立を継続していく。		